

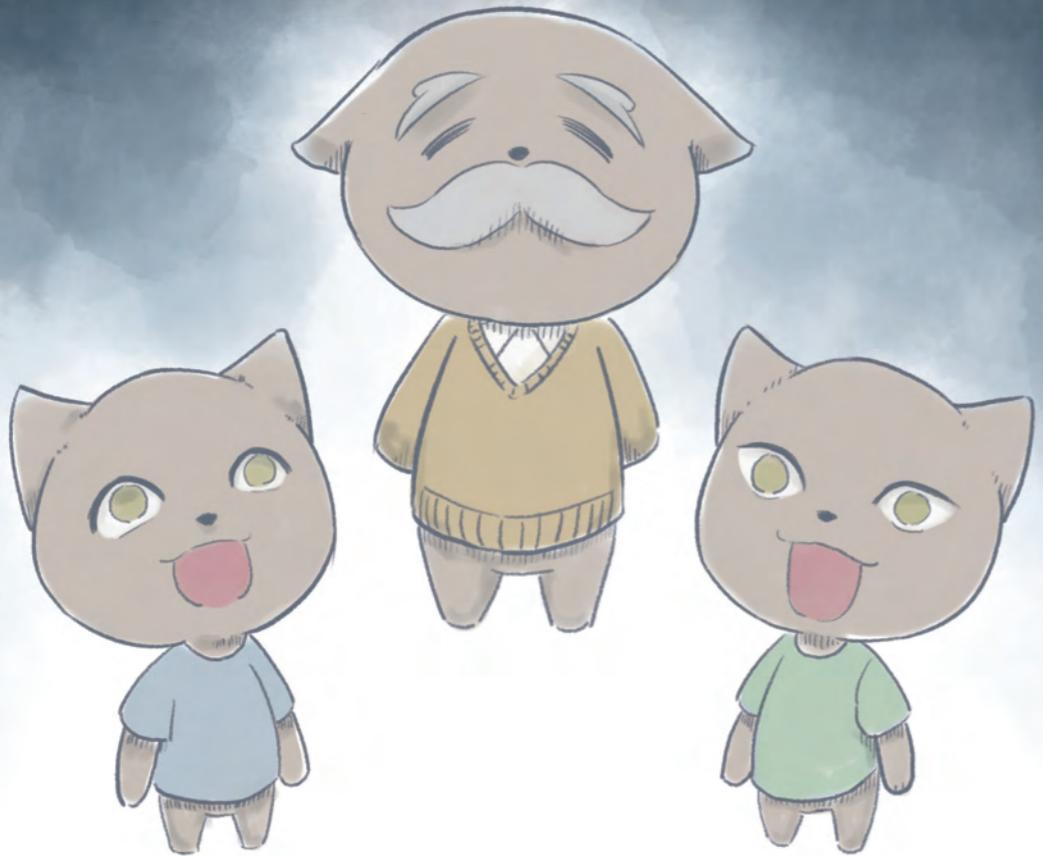
あの川をさがして



あの川をさがして



さく・みわあゆか



やあ!ボクはソラ!

今日はおじいちゃんちのプラネタリウムで星を見てるんだ!

ふたご  
こっちは双子の弟のクウ!

「すごい!きれいだね!」

ボクが言った。

「ねえねえ!おじいちゃん!あの川みたいなものは何て言うの?」

クウがゆびをさしながら聞いた。

「ああ、あれはね天の川っていうんだよ」



「天の川! すごいきれいだね! 初めてみた!」

クウは、とびねるような声で言った。

「昔は今くらいの時期にはよく見えたんだけどねえ。」

今はすっかり見えなくなってしまったの…」

おじいちゃんが、かなしそうな声でつぶやいているのが  
聞こえた。



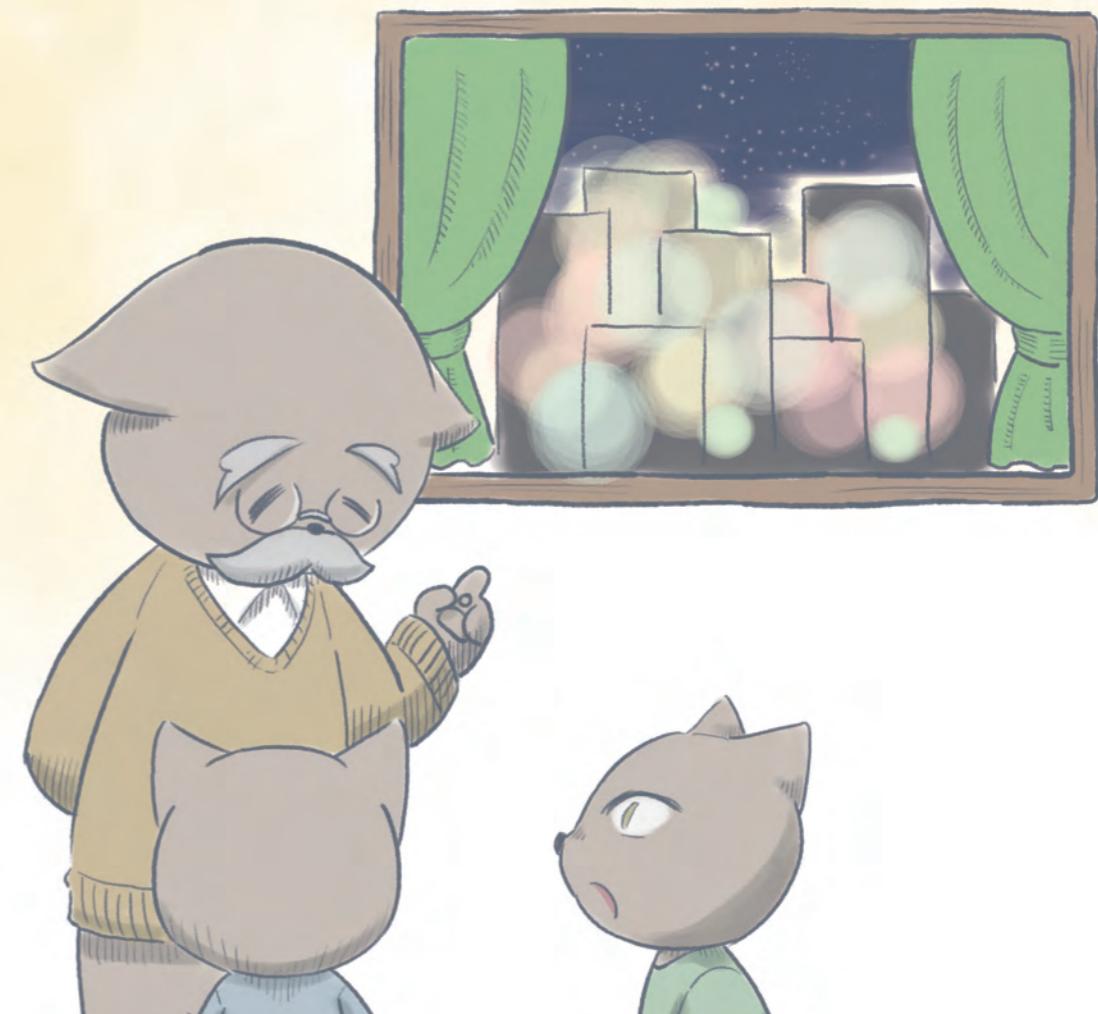
「どうして天の川が見えなくなっちゃったの?」

ボクはおじいちゃんにそう聞いた。

「町が電気で明るくなったからだよ。」

夜でも明かりがあるから暗くないだろう?」うん。

「町が明るいとお星さまが明るくなれないんだよ」



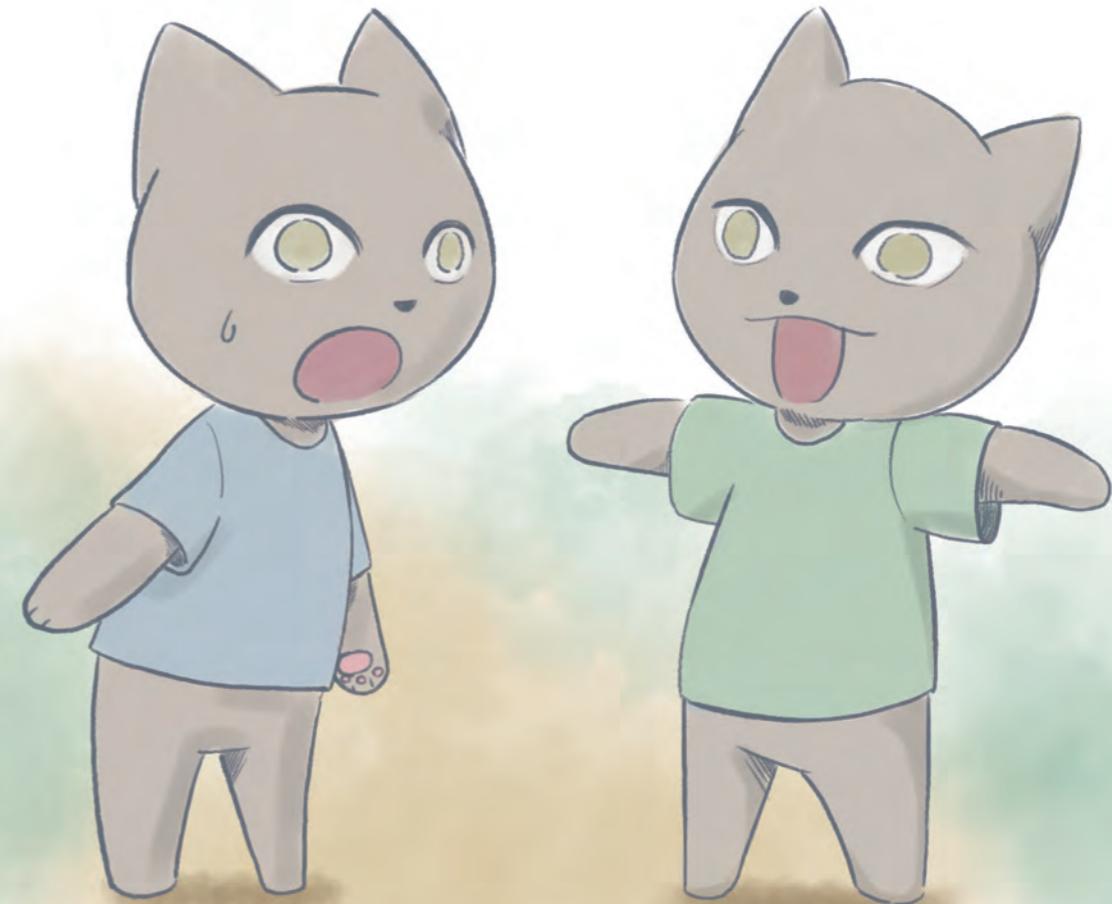


「じゃあ、明かりを消せばお星さま明るくなる？」  
クウはそう、おじいちゃんに聞いた。

「そうなるのよ  
電気を消せば、ね…。



おじいちゃんちからの帰り道。  
「ねえ、ソラ。この町の明かり消しちゃおうよ！」クウがとつぜんそう言った。  
「明かりを消せば天の川が見えるって、おじいちゃん言ってたろ？」  
たしかに言ってたけど…  
「ええ!? ムリだよ! ゼったいムリ!」そんなのどうやってやるのさ…



「どうして?ソラも見たいでしょ?天の川!」

「うう…。たしかに見たいけどさ…」

ほんとうにそんなことできるの?

「なら決まり!ボクらでこの町の明かりを消すんだ!」

クウはげんきにそう言った。



「でもこの町の明かりを消すなんてどうやるの?」

ボクが言った。

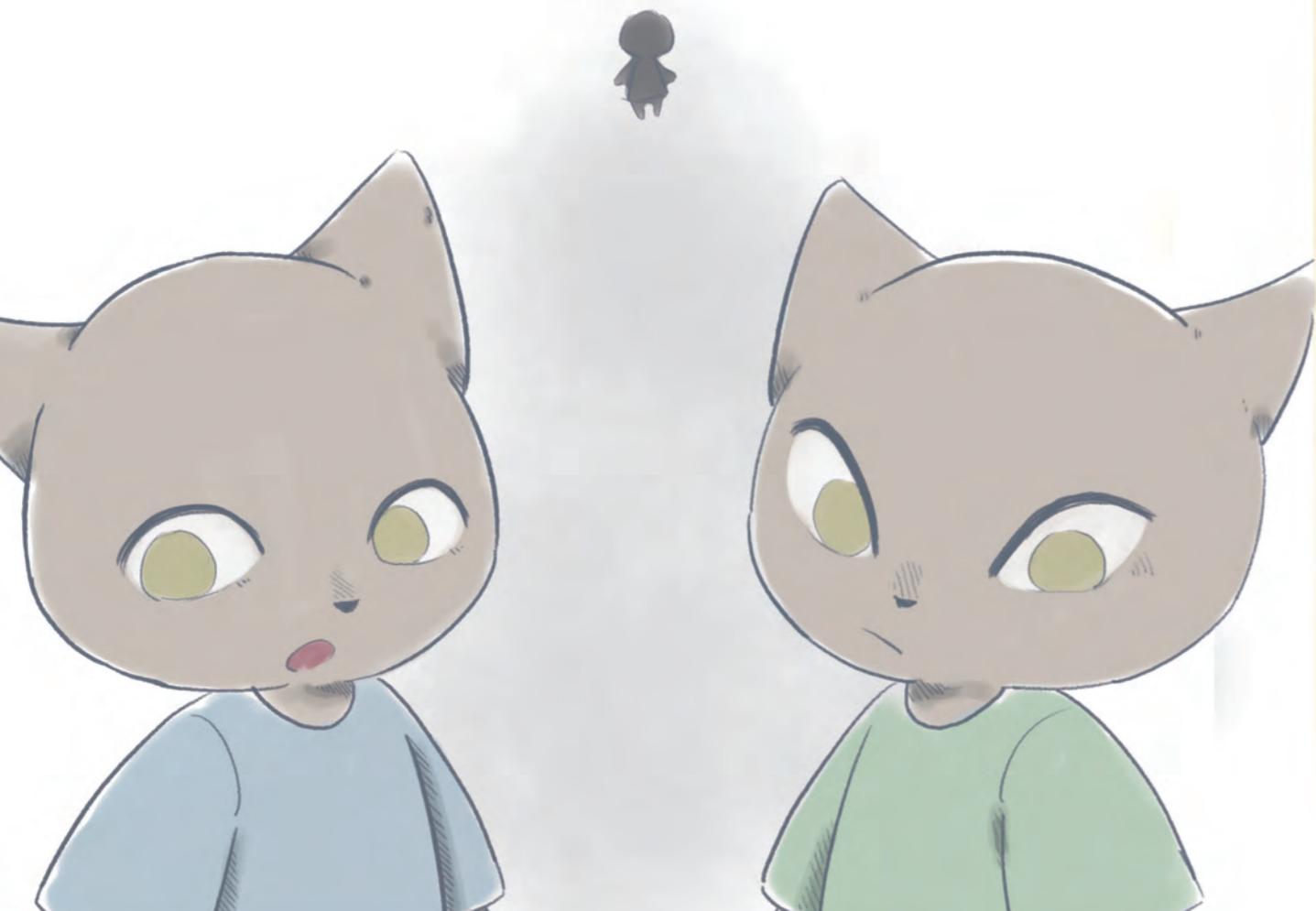
「それは…ほら!"ひみつへいき"みたいなのでバ-っと消すんだよ!」

クウはエッヘンとそう言った。

「だからそれをどう作るんだよ!」

ほら、やっぱりムリじゃないか。





「だったらワタシが消してあげようか?」  
とつぜん、ボクたちの後ろから声が聞こえた。  
ボクたちはいきおいよく、ふりかえる。

そこにいたのはキラキラひかるネズミさんだった。

「…だれ?」

「…あ!!あれじゃない?ソラ!!妖精!」

クウが言った。

「妖精!?そんなまさか…」

絵本じゃないんだから…

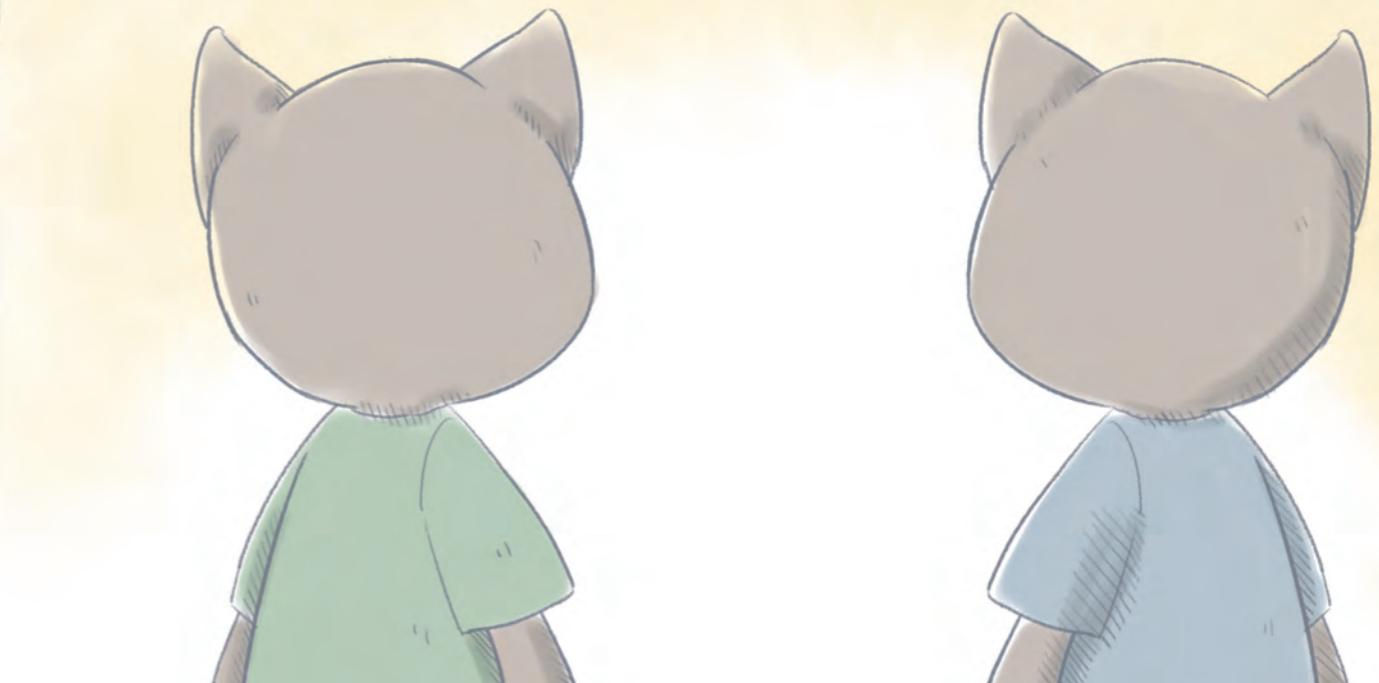


「その通り!」

ネズミさんが言った。

「わたしは星の妖精です!」

ええ!?ウソだろ!?



「でも何で妖精がいきなり…」

ボクが言った。

「わたしたち星の妖精は星が見えないと調子が悪くなるんだ。

最近は町が明るすぎて困ってるんだよね…」

妖精はかなしそうに言った。

「だからこの町の明かりを消してあげる！」



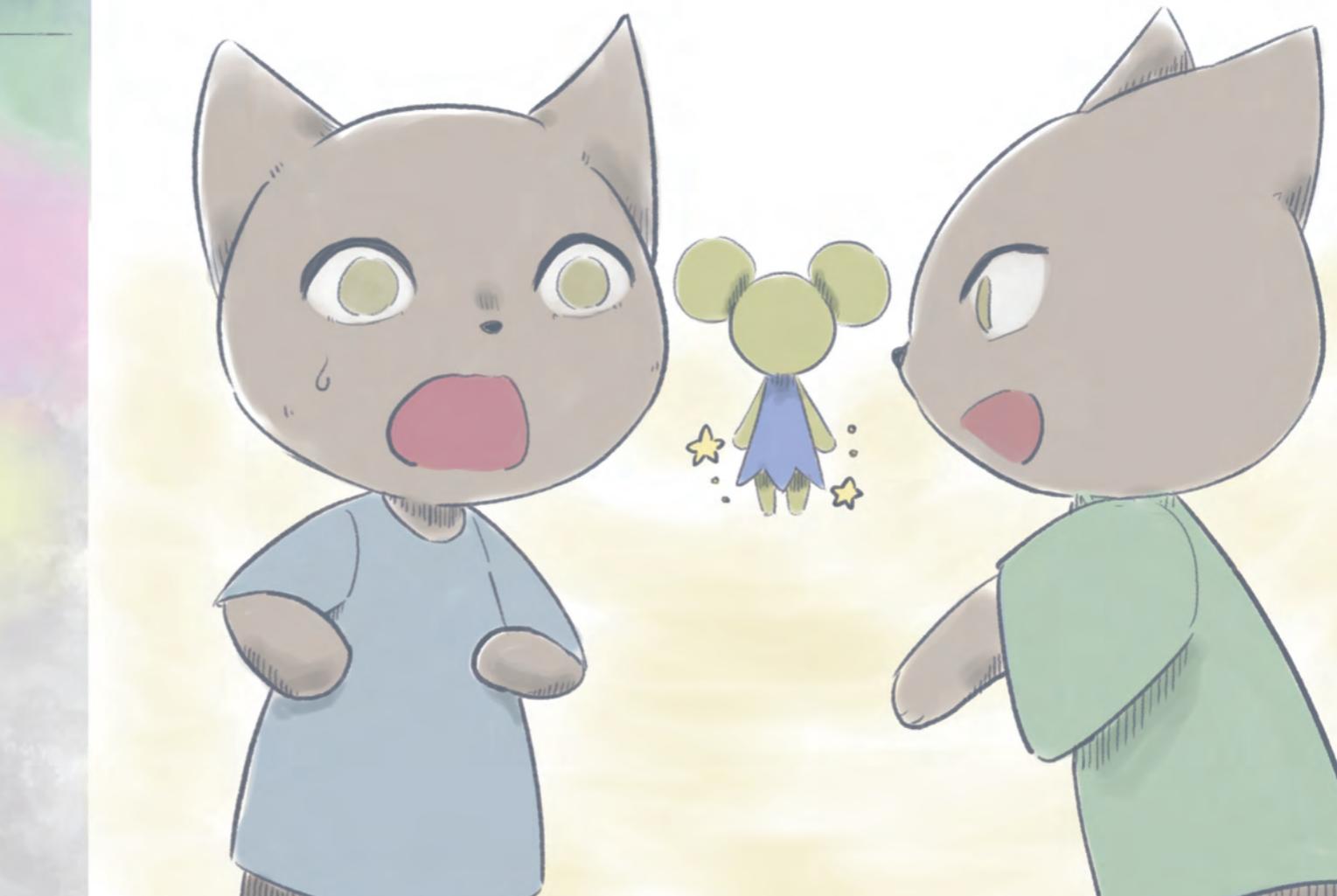
「ダ、ダメだよ…そんなの」

本当にやって大丈夫…?

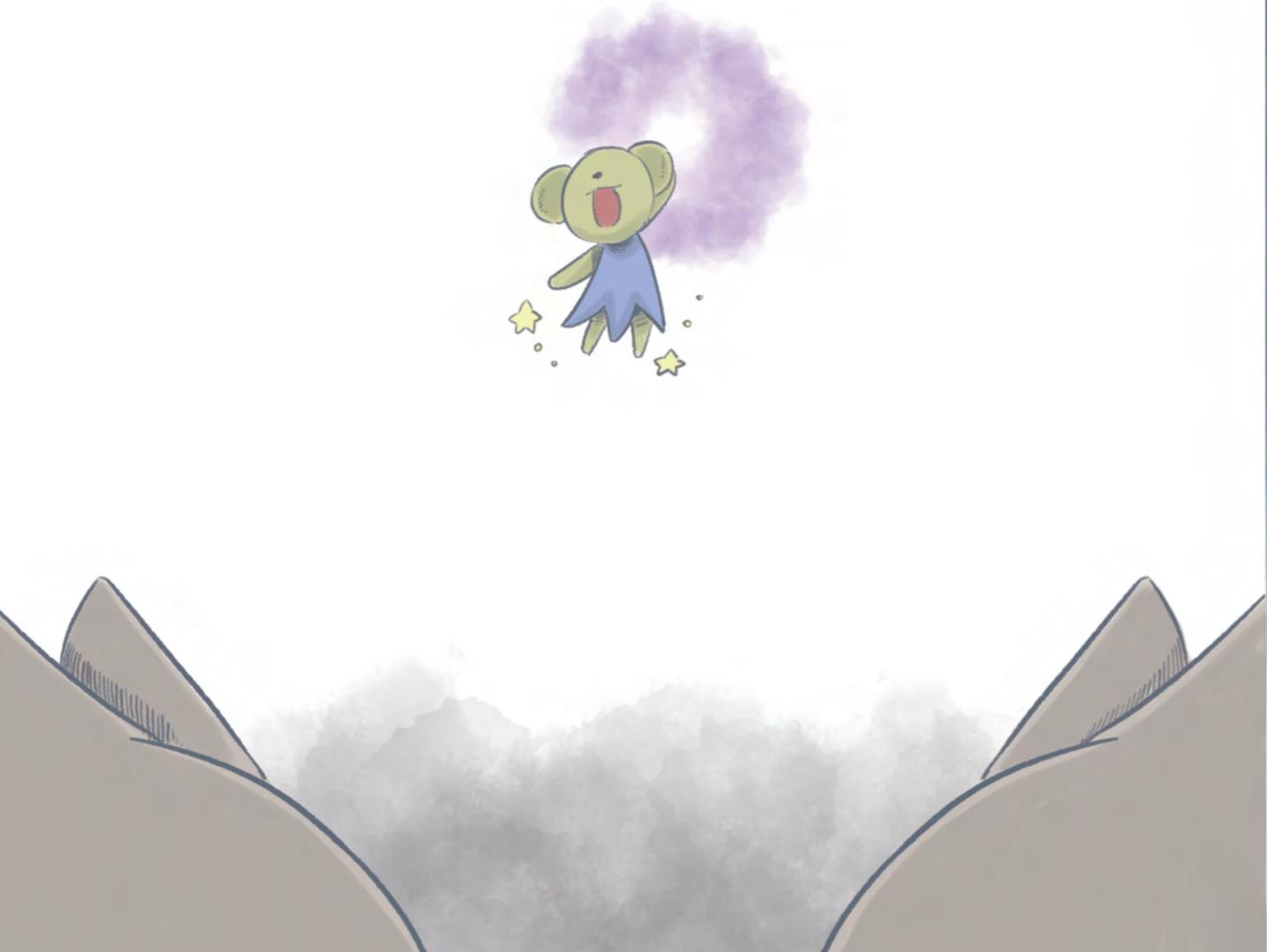
「いいんだよ! 天の川が見えるようになるチャンスなんだよ?」

クウはそう言って聞かない。

もう! クウはのんきだなあ!!



ボクとクウがそうやって、言いあいをしているうちに、  
妖精が魔法を唱えた。すると光がいっきにひろがった。



光がひろがると電気が消え始めた。  
どんどん暗くなっていく。  
どんどん、どんどんと。





「ソラ! 見て! 天の川だよ!」  
そう言われてボクは空を見た。

そら  
空には、声がでなくなるほどきれいな  
天の川があった。

「わあ…」

ボクはやっと声が出た。

「きれいだね。ソラ」

「うん!きれいだね!クウ!」

ボクたちはしばらく空を見上げていた。



そうしていると、何だか町がさわがしいことに気づいた。

「停電!?」「電気がつかない!」「どうして!?」

「これから出かけるところだったのに!」「何で明るくならないの!?」

どうやら電気が消えていることにみんなが怒っているようだった。



「何でみんな怒ってるの？」  
クウがふしぎそうに言った。  
「や、やっぱり消しちゃダメなんじゃ…」  
ボクはおそるおそるそう言った。  
「そんな!でも明かるかったら天の川見れないよ?」  
「でも、みんな空見てないよ…」  
こんなにきれいなのに…

「ソラ、クウだいじょうぶか」  
おじいちゃんが走りながらやってきた。  
「おじいちゃん。どうしたの?」  
クウが言った。



「急に停電になったからおまえたちが心配でな、  
怖くなかったか?」  
「しかしどうしてだろうな…急に停電なんて」

「あのねおじいちゃん!僕たち天の川が見たくて、  
この町の明かりを消してって妖精にお願いしたんだ!」

クウがとくいげにそう言った。

「そしたら天の川が見えたんだ!…でもみんなが怒っちゃった」  
みんな星を見てくれなかっただ…



「おじいちゃんの言い方が悪かったね」  
おじいちゃんは、優しく言った。  
「たしかに、明るいから天の川は見えなくなってしまった。  
でもね、明るいからこそワシらは助かっているんだ。  
夜におでかけしたり、怖い思いをしなくていい。  
お前たちもそうだろう?」

うん、たしかに。



「じゃあ、ボクたちがやったことってダメなこと?」

みんなが怒っちゃったし…

「天の川のために何かしようとしたのはいいことだよ。なに

でも、いきなり明かりを消してはいけなかったね」

おじいちゃんは、そうなぐさめてくれた。



「じゃあ、もう天の川は見れないの?」

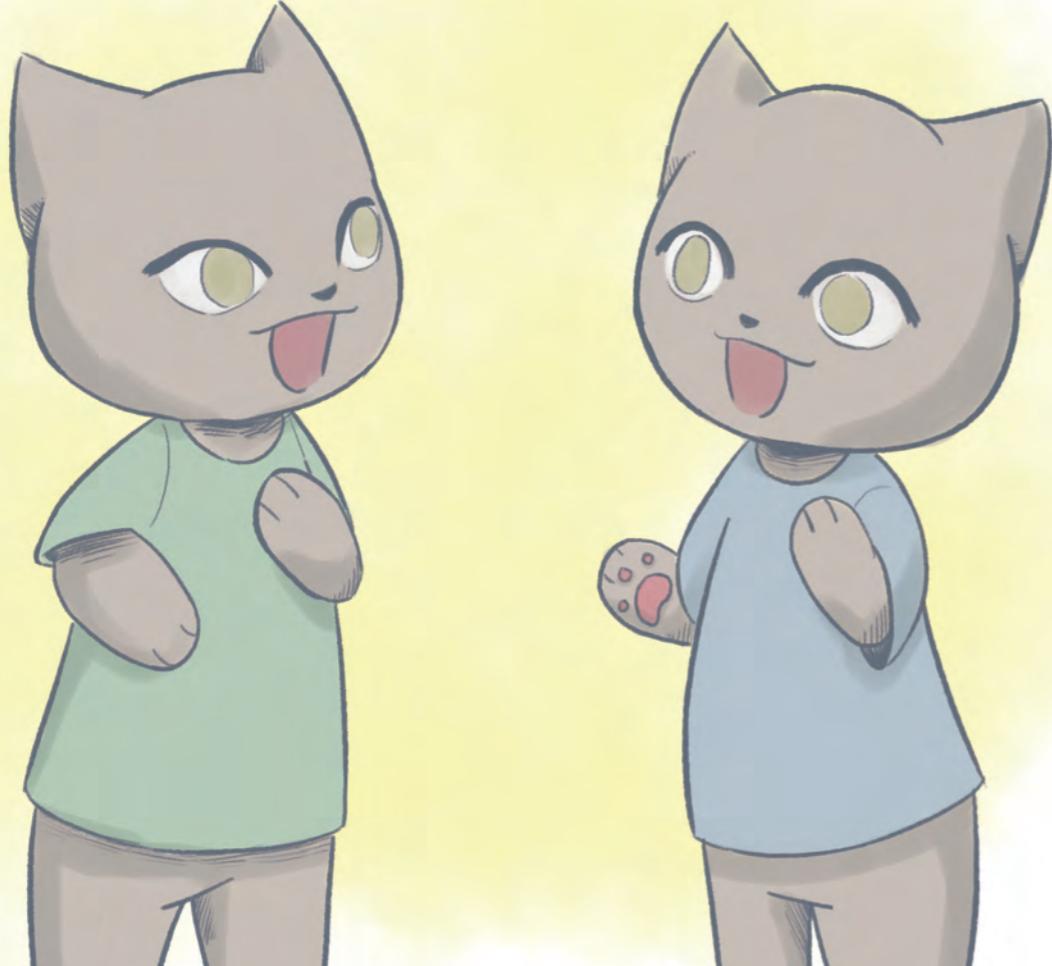
クウが言った。

「なくすことだけが正解じゃないんだよ。せいかい

お星さまが輝けるように、工夫した明かりもあるんだ。ほし  
みんな くふう あま がわ み  
皆が工夫していけば天の川が見えるようになるさ」

なんだね!

「じゃあ、ボクたちもっと勉強するよ！そうすればもっと良くなるよね！」  
クウが言った。  
「うん！ねえさっきの明かりのことみんなに教えようよ！」



「おっと！それはいいがその前にまずは明かりを元に戻さないとね。  
妖精さんはいるかい？」



「ねが  
お願い、  
ようせい  
妖精さん」  
ボクたちは声をそろえて言った。



「はい!何でしょう?」  
妖精が現れた。  
「この町の明かりを元に戻してくれるかい?」  
おじいちゃんが言った。



「あか  
明かりを戻すと、調子が悪くなっちゃうんだよね…」

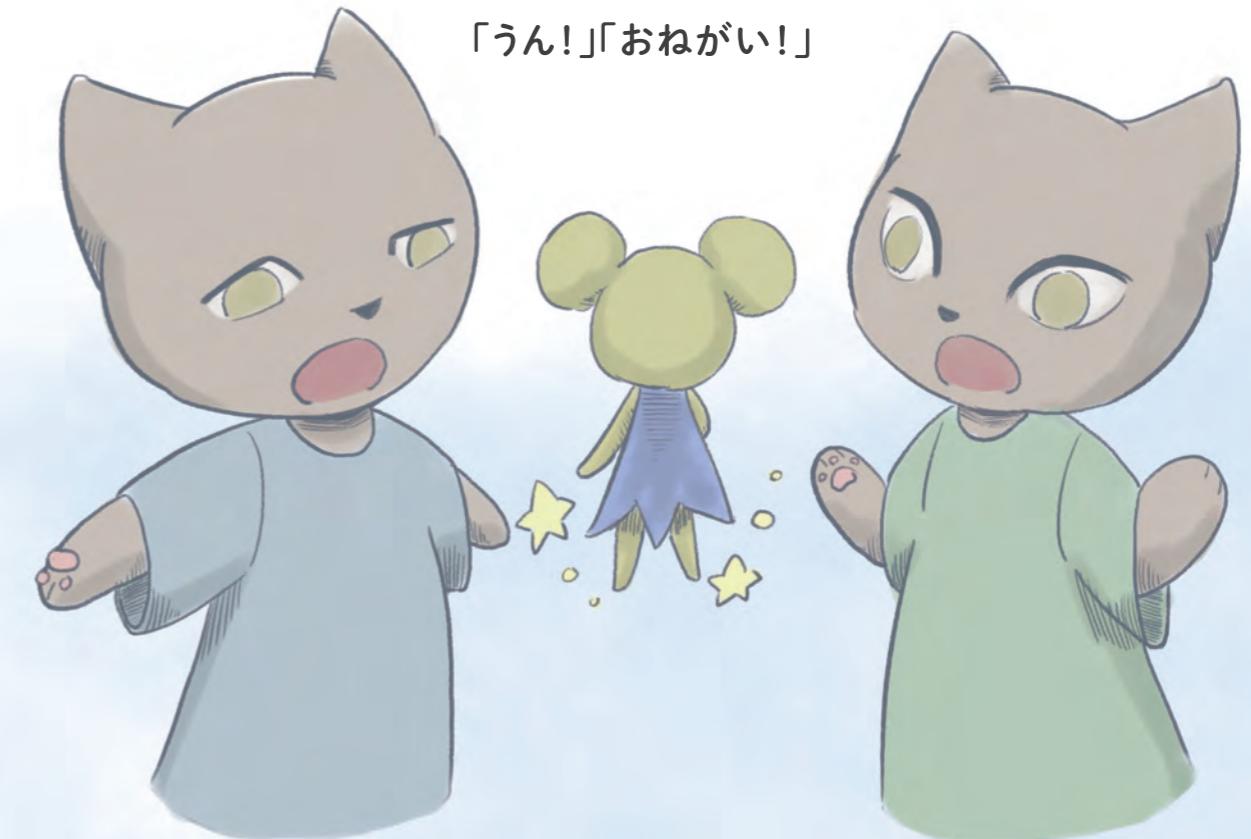
妖精は言った。

「そんなこと言わないで!ボクたち、これから星が見えるように  
がんばるからさ!」

ボクが言った。

「…わかりました。元に戻せばいいのですね?」

「うん!」「おねがい!」





ようせい　まほう　ひかり  
妖精の魔法の光で  
また町に明かりがもどった。

「消えちゃった…天の川」

「消えちゃったね」

ボクたちは空を見上げそうつぶやいた。

「でもまた見えるようになるよね。天の川」

ボクが言った。

「見えるようにするためにボクたちも頑張ろうよ」

クウがかえす。

「うん!」

またあの川を見るために…



おわり



